

# 御伽草子『二十四孝』の説話本文について

——清原枝賢の学問をめぐって——

坪井直子

## 〔抄録〕

御伽草子『二十四孝』は、元の郭居敬が撰した『全相二十四孝詩選』の和訳を基に草子化されたと考えられている。両者の五言詩は確かに一致するが、しかし、各話の説話本文は一致していないものがある。近年、董永条の説話本文が蒙求に基づくことなど、複数の文献が典拠とみられることが分かってきた。本稿も、説話本文の典拠について考察するものであり、清原枝賢が関わる静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』と龍谷大学蔵『二十四孝注』が、御伽

草子の説話本文の典拠である可能性を考察し、二つの文献が御伽草子に影響していることを指摘した。また枝賢は舟橋本孝子伝の書写を行っていることから、舟橋本孝子伝についても、同様の考察を行い、御伽草子の一部に舟橋本孝子伝が影響している可能性を指摘した。

キーワード 二十四孝、孝子伝、御伽草子、清原枝賢

## はじめに

室町末に成ったとみられる御伽草子『二十四孝』（以下、御伽草子とする）は、元の郭居敬が撰した『全相二十四孝詩選』（以下、二十四孝詩選とする）の和訳を基に草子化されたと考えられている。両者の間で、収載する二十四の孝子譚と各話にある五言詩は確かに一致するが、しかし、各話の説話本文は二十四孝詩選と一致していないもの

がある。近年、董永条の説話本文が蒙求に基づくことなど、複数の文献が説話本文の典拠とみられることが分かってきた。本稿も、説話本文の典拠について考察するものであり、清原枝賢が所持及び執筆したとみられる二つの二十四孝詩選の抄物が、説話本文の典拠に関わるものである可能性を検討する。また、枝賢が書写した孝子伝についても同様の検討を行いたい。このことはまた、御伽草子成立の手掛かりともなるだろう。

御伽草子の典拠に関する先学の指摘を確認しておきたい。御伽草子の典拠について初めて言及したのは、山岸徳平氏であろう。説話文学における中国文学の影響を俯瞰された山岸氏は、

お伽草子の廿四孝は、日記故事などの文によるものかと思われ  
とした。<sup>(1)</sup>次に、日本に於ける二十四孝の流布と影響を考察した川口久  
雄氏は、御伽草子と日記故事を比較し、次のように述べている。<sup>(2)</sup>

日記故事では仲由・江革、御伽草子では張孝・張札、田真・田  
広・田慶の出入があり、且つ説話内容に異同あるもの四條に及び、  
且つ詩句の異同の甚しきもの四條に及ぶ。これらによると日記故  
事から直ちに御伽草子となったとはどうしても考へられない。  
：日記故事には異本が尠くなかつたやうであるから、我が御伽草  
子は日記故事の一異本に基づき翻訳したものであらうと推定され  
るが、その所據原本は今日管見に入らない

山岸氏は二十四孝詩選に言及しているのでその存在を知っていたよう  
だが、しかし日記故事を御伽草子の典拠に比定している。川口氏も、  
長澤規矩也氏を通じて成實堂文庫に蔵される『二十四孝詩選』を知っ  
ていたように思うが、やはり追究はしなかつたらしい。母利司朗氏に  
よれば、江戸時代以降は、日記故事系二十四孝が漢籍二十四孝の代表  
であり流布本であつて、二十四孝詩選はその異本としか認識されなかつ  
たために、山岸氏も川口氏も日記故事系二十四孝を典拠としたよう  
である。<sup>(4)</sup>

二十四孝詩選が、御伽草子の典拠と目されるようになるのは川瀬一  
馬氏からで、川瀬氏は、「全相二十四孝詩註」と題される二十四孝詩  
選の室町中期書写本(川瀬氏は五言詩註本と称する)を入手し、二十  
四孝詩選の伝本等を調査した結果、

翻訳の底本は五言詩註本を用ひ、仮名交りの本文が其の詩註の本  
文に據つて翻訳してある事は両者対照してみれば一見明瞭である  
と述べた。<sup>(5)</sup>そして、昭和二十一年に禿氏祐祥氏が龍谷大学に蔵される  
二十四孝詩選の伝本を紹介するに至つて、御伽草子の二十四孝詩選典  
拠説は確定したと言つて良いだろう。<sup>(6)</sup>明嘉靖二十五(一五四六)年刊  
本の写しとみられる室町後期写の乙本、絵入りの近世初期写の甲本は  
共に「新刊全相二十四孝詩選」と題され、御伽草子とは五言詩が一致  
するだけではなく二十四孝からなる孝子譚の順序もほぼ一致する(黄  
山谷条が、龍谷大学蔵本では十番目に、御伽草子では二十三番目に位  
置する)。龍谷大学蔵本のような二十四孝詩選が、御伽草子の成立に  
大きく関わったことは間違いないだろう。

但し、二十四孝詩選から御伽草子へと直ぐに和訳されたと見る向き  
は少ない。二十四孝を中心とする膨大な孝子説話を蒐集して研究の基  
盤をつくつた徳田進氏は、「お伽草子所収のような和文を見るまでに  
は、階程があつた」とし、御伽草子が成立する契機を「天正頃の二十  
四孝学」に探つた徳田和夫氏もまた、

十五世紀初頭から訳出され始め、「二十四孝」に落ち着くまで、  
相当の曲折があつたものと思われる。おそらく五山僧を中心に註  
や抄と呼ばれるものがかなり作られたであろう

としている。<sup>(8)</sup>尚、御伽草子の成立年代については、川瀬氏が、二十四孝詩選の伝本の流布状況などから、元龜、天正頃を推定している。<sup>(9)</sup>その後の研究に於いても、川瀬氏の説を退けるようなものはなく、かえって、川瀬氏の推定を補強しているだろう。

御伽草子が二十四孝詩選を典拠とする主たる理由は、御伽草子と龍谷大学蔵『全相二十四孝詩選』の孝子譚の順序がほぼ一致することと、御伽草子と二十四孝詩選の五言詩が一致することであり、これらのことについては問題はない。だが、御伽草子の説話本文については、二十四孝詩選と異なるものがあり、単純に二十四孝詩選を典拠とすることは出来ない。徳田和夫氏も「現在のところ、「二十四孝」の説話本文と一致する文献は報告されていない」と留意していたが、近年、<sup>(10)</sup>二十四孝の説話本文の中に、蒙求や法苑珠林に拠った話があることが報告されている。

御伽草子董永条の説話本文が、蒙求「董永自売」注に拠っていることを指摘したのは三浦俊介氏である。三浦氏は、漢籍、唱導文献などに記述された董永譚と比較検討した上で、蒙求が典拠であることを明らかにした。<sup>(11)</sup>その後、川崎博氏が、王褒条も蒙求「王褒柏惨」注に拠っていることを指摘し、さらに、黒田彰先生は、王褒の出身地である「宮陵」を、御伽草子と文禄五年版『蒙求』注が揃って「宮陰」と誤ることから、「御伽草子は或いは、蒙求の徐注の一本に拠るか」としている。<sup>(12)</sup>川崎博氏はまた、二十四孝詩選と御伽草子の嵯峨本を比較し、<sup>(13)</sup>顯著に相違している七説話即ち漢文帝、丁蘭、楊香、董永、王褒、朱寿昌、張孝張礼条を検討して、丁蘭条が劉向孝子伝（法苑珠林四十九

等所引）に拠ることを明らかにしている。川崎氏は、張孝張礼条についても、盗賊から「米二石塩一駄」を与えられるという箇所が二十四孝詩選にないことを問題にしている。<sup>(14)</sup>高橋健太郎君の教示によれば、御伽草子張孝張礼条は、千字文「恭惟鞠養」注を和訳しており、問題の箇所も千字文注に「更与礼米二石塩一斤」という近似の記述がある。

以上、判明している御伽草子説話本文の典拠を上げたが、これら是一部であり解明されていない孝子譚が依然として残る。そこで、本稿は清原枝賢に注目してみたい。枝賢と関係する二十四孝詩選の抄物が静嘉堂文庫と龍谷大学に伝存している。先に述べたように、徳田和夫氏は、二十四孝詩選の註や抄が五山僧を中心につくられ、それらが御伽草子の成立に影響を及ぼしたであろうことを指摘しているが、それとともに、公家が二十四孝に関心を示しており、五山僧だけでなく公家の知識人の参画があったであろうことも指摘している。静嘉堂文庫と龍谷大学の伝本は、公家の知識人が関与した二十四孝詩選の抄物として興味深いものと言えよう。また、枝賢は孝子伝（所謂舟橋本孝子伝）の書写も行っている。二十四孝が流布する以前は、孝子譚といえは孝子伝と蒙求が上げられていた。宝物集一に「こまかには孝子伝、蒙求などに申て侍るめり」とあり、十訓抄六に「このたぐひ、もろこのことなれば、孝子伝、蒙求などにしるせるによつて、みな人、口付けたる物語なれば、くはしく書き述ぶるに及ばず」とあるがごとくである。御伽草子の董永条や王褒条が、蒙求注を和訳しており、且つ、室町末の知識人の周辺に孝子伝があったのならば、御伽草子にも舟橋本孝子伝の影響を認めることが出来るのではないだろうか。以上の理

由により、枝賢が関係する三つの文献と御伽草子の説話本文を比較検討し、その関わりについて考察する。

## 二

枝賢と関係する二つの二十四孝詩選の抄物とは、静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』<sup>(15)</sup>と、龍谷大学蔵『二十四孝注』<sup>(16)</sup>である(以下、静嘉堂文庫蔵本を静嘉堂本抄、龍谷大学蔵本を龍谷大学本抄とする)。二つの二十四孝詩選の抄物を検討するが、その前に静嘉堂本抄を詳細に考察した柳田征司氏による二十四孝詩選の抄物の分類について触れておきたい。柳田氏は、枝賢と関係する二つの伝本を含む計七つの伝本について分類を試みている。まず、専ら二十四孝詩選に拠るものと孝行録系の本の影響を受けたものがあることに注目して、『全相二十四孝詩選』抄と『孝行録』系本混淆抄とに分け、次に、賛詩語句の説明を持つ注釈型と、孝子の事跡の説明だけで逐語的に注釈する部分を持たない事跡説明型に分けている。そして、詩形にも注意を払い、注釈型を五言詩注釈型と七言詩注釈型に分けている。柳田氏の分類によれば、静嘉堂本抄は『全相二十四孝詩選』抄、五言詩注釈型となり、龍谷大学本抄は『全相二十四孝詩選』抄、事跡説明型本となつて、分類項目は異なる。しかし、柳田氏は二つの抄の間に影響関係があることを認め、龍谷大学本抄についても詳細に考察している。柳田氏の考察を基に二書の関係を確認し、さらに御伽草子との関わりを考えてみたい。

静嘉堂本抄は、川口氏が紹介した写本<sup>(17)</sup>で、柳田氏によれば、『逆耳集』、

『金句集』とともに江戸初期に書写されたとみられる(『逆耳集』、静嘉堂本抄、『金句集』の合本)。内題に「二十四孝五言之詩」、尾題に「二十四孝詩註」とあり、奥書には「此本清家以秘本写早」とある。『逆耳集』の奥書に「右一書号逆耳集、慕聖賢之風俗、恐佞邪之惡逆、而信筆信口、為童蒙、以仮名加注解、勿出窓外而已 孔徒野人梅子 天正十四<sup>戊辰</sup>歳三月日 此書清家以正本写之早 正甫」とあり、『金句集』の奥書に「天正十四<sup>戊辰</sup>年卯月下旬吉曜日、右之本金句集之内、語有不足可見合」とあることから、天正十四(一五八六)年に、清原家と関わりのあつた正甫という人物が、清原家に存した三書を啓蒙書として一冊に書写し、それを江戸初期に転写したものらしい。一方、龍谷大学本抄は、外題に「二十四孝注」、内題に「二十四孝」とあり、奥書に「於逆旅不蓄一卷書、遇錯乱荷薪掉船及数年、于爰半井正流医伝安立軒賢息兵庫頭元成雖弱冠、孝行忠恕之得道、雖知命翁牆面虛左者、感歎之余備硯下 元龜三歳舍壬申季冬大寒後一日 宮内卿清原朝臣枝賢<sup>印朱</sup>(以下別筆) 此本老師曲肱齋、乞得之写之、清家秘抄尤大切也 占天正十九仲夏日三十郎如探叟(花押)」とあることから、元龜三(一五七二)年に、清原枝賢が、医家であつた半井元成の孝行忠恕に感嘆して執筆したもののようだ。それが、枝賢の門人である曲肱齋(曲肱齋)によつて写され、天正十九(一五九二)年には、曲肱齋の弟子である藤原三十郎盛政三慶へと伝わっていったらしい。

静嘉堂本抄と龍谷大学本抄は、形式は異なるが、孝子の順序は同じであり、内容も近似した箇所が多くある。柳田氏は、二つの抄の関係について、龍谷大学本抄からは静嘉堂本抄の本文が出てこない、他の

抄物に五山僧が作成したものである、静嘉堂本抄がゾ体で書かれている、といったことから、五山禅僧によってつくられた静嘉堂本抄のようなものに依拠して、枝賢が自らの抄即ち龍谷大学本抄を作ったと推定している。二つの抄の文体の差異や、龍谷大学本抄田真条の話の筋が分からなくなっていることを考えると、この見解は首肯すべきものと思う。柳田氏はまた、元龜、天正以後江戸初期までに作成された末期抄物の特徴をふまえて、次のように述べている。

静嘉堂本『二十四孝詩註』について言えば、本抄は、全七丁の短小な抄物であり、二十四孝を主題とした漢詩を作るための故事を簡便に学ぶのに役立つように作られている。そして、本抄は、原典『全相二十四孝詩選』と切り離して、これだけで一つの読み物として読めるようになっていいる。このような性格の抄物がお伽草子『二十四孝』に連続していることは言うまでもない

柳田氏は、二十四孝詩選の抄物を主体に考察していて、抄物と御伽草子の関係については具体的に考察していない。そこで、静嘉堂本抄と龍谷大学本抄を、御伽草子の説話本文と比較検討したい。

二つの抄と御伽草子の間で、近似性が認められるのは、楊香条と呉猛条である。先ず、楊香条について検討する。次に御伽草子を上げるが、二十四孝詩選に拠っていないことを明確にするために、二十四孝詩選も並べて上げる（御伽草子は嵯峨版に拠り、二十四孝詩選は龍谷大学蔵乙本に拠り甲本を参照した。引用に際しては私に漢字仮名を改め句読点等を施した）。

#### ・御伽草子「楊香」

深山逢<sub>レ</sub>白額 努力搏<sub>二</sub>腥風<sub>一</sub>  
父子俱無<sub>レ</sub>恙 脱<sub>二</sub>身饑口中<sub>一</sub>

楊香はひとりの父をもてり。有時、父と、もに山中へ行しに、たちまちあらし虎にあへり。楊香、父の命をうしなはんことをおそれ、虎を追さらんとし侍りけれ共、かなはざる程に、天の御あはれみをたのみ、こいねかはくは、我命を虎にあたへ、父をたすけて給へと、心さしをふかくして祈けれは、さすが天もあはれと思ひ給けるにや、今まで、たけきかたちにて、取りくらはむとせしに、虎俄に尾をすへて、にけしりそきけれは、父子共に、虎口の難をまぬかれ、つ、かなく家に帰り侍となり。是偏に、孝行の心さしふかき故に、かやうのきとくをあらはせるなるへし

#### ・二十四孝詩選「楊香」

深山逢<sub>二</sub>白額<sub>一</sub> 努力搏<sub>二</sub>腥風<sub>一</sub>

父子俱無<sub>レ</sub>恙 脱<sub>二</sub>身饑口中<sub>一</sub>

楊香其父為<sub>レ</sub>虎曳去、香搏<sub>レ</sub>虎、遂免<sub>二</sub>於害<sub>一</sub>

両者とも五言詩は同文である。しかし、内容は大きく異なる。二十四孝詩選は、父（楊豊）に害を加えそうになった虎を娘の楊香が搏つて（搏つ…素手でたたく意）、虎の害から免れる話であるのに対し、御伽草子は、山中で虎と行き会った時に、自分の命を差し出すので父を助けてほしい、という楊香の天への祈りが通じ虎から逃れる話となっている。両者は、虎から逃れる点は同じでも、その方法が異なっているのである。日記故事巻頭二十四孝と孝行録前贊章の楊香条とも比較してみる（日記故事巻頭二十四孝は万曆新歲刊寛文九（一六六九）年模

刻『新鍔類官様日記故事大全』卷一「二十四孝」に拠り、孝行録は尊經閣文庫蔵権近注解孝行録に拠った。引用に際して私に句読点を施した。

・日記故事巻頭二十四孝「搯虎救親」

晋楊香年十四歳、嘗隨父豊、往田獲粟、父為虎曳去、時楊香手無寸鉄、惟知有父而不知有身、踴躍向前、搯持虎頸、虎亦靡然而逝、父纔得免於害。

詩 深山逢白額 努力搏腥風

曰 父子俱無恙 脱身饒口中

・孝行録前贊章「楊香跨虎」

楊香魯國人也、笄年、父入山中、被虎奮迅、欲傷其父、空手不執刀器、無以禦之、大叫相救、香認父声、匍匐奔走、踴躍虎背、執耳叫号、虎不能傷其父、負香奔走、困而斃焉。

魯邦有女、字曰楊香、父遭虎逐、頓什山岡、聞声赴救、直前自当、騎背挈耳、叫呼彼蒼、未遑噬搏、載以奔忙、白額俄斃、翠娥無傷 (権近注解部分は略す)

日記故事巻頭二十四孝では、楊香が素手で虎の頸をしめつけて虎を退散させ、孝行録前贊章では、楊香は虎の背に跨り耳をつかんで叫んでいるうちに虎が斃死したとある。楊香譚は、逸名孝子伝(太平御覧八九二、古今事文類聚後集三十六等所引)や異苑十等にみえる話で、逸名孝子伝は二十四孝詩選に近似し、異苑十や日記故事三孝感類「打虎奪父」は日記故事巻頭二十四孝に近似している。これらの文献では楊

香は虎と闘って退散させるのであり、父の身代わりを天に祈るといった要素はない。ところが、静嘉堂本抄と龍谷大学本抄には、次のようにその要素がみえるのである。

・静嘉堂本抄

(一) 内割注

楊香(親ノ老耄シテ山ニ入テ遊ハント云程ニ、楊香親ヲツレテ山ニ入テ遊フ時ニ虎ニ行逢フタリ)、深山逢白額(白額トハ、虎ノ事ヲ、二人ノ者ヲ食トテヨロコヒテ見エタリ)努力搏腥風(努力トハカライカラシ、搏腥ノ風ハ、廣クヲソロシイ風ヲ吹セタ也、其楊香手コフシヲ握テ、向レ虎ニ心ノ中ニ天ニ訴ヘヲ申ス、我ハ時節到来也、親ライケテ賜レト祈願ス、天モアハレミ給ヘハ、虎モシリソクソ)、父子俱無恙、脱身饒口中(饒口トハ鰐ノ口ヲノカレタソト云心ナリ)

・龍谷大学本抄

楊香 老耄たる親あり。山に入遊ことを求。親をおふて、山に入あそふ。しろ額なる虎は必人をくらふなり。白額なる虎、此楊香父子を食殺さんと喜て、風をおこし、いかりをなして向ふ。楊香心中に、天に祈申て、いはく。我かならず、虎の為に命をうしなふへし。老たる親の命をたすけ給へと、念しつ、手こふしを、にきりて、虎にかかり向ふ。虎、をそれて、さりぬ。孝心のかんする所なり

なぜ御伽草子や二つの抄に、父の身代わりを天に祈る要素があるのか。考えられる理由としては、二十四孝には身代わりを願う話や天感を蒙

る話があるので、それらによる影響がある。例えば、身代わりになることを祈った話として庾黔婁<sup>20</sup>がある。庾黔婁は父の病気の身代わりを北辰（御伽草子は「北斗」とする）に願うが、これは二十四孝詩選庾黔婁条の五言詩第三、四句に「願將身代死、北望啓憂心」と詠まれているので、静嘉堂本抄のような五言詩のみで話の筋を捉えるような場合でも、庾黔婁の行為は理解されていたと思われる。他に、身代わりになろうとする話としては、賊に捕らわれた弟の身代わりを請う張孝張札譚があり、天感を蒙る話としては、天に祈って筭を得る孟宗譚等がある。これらの話から類推して、楊香が父の身代わりを天に祈るといった要素が導入されたのではないだろうか。天正年間の成立とみられる月菴醉醒記所収「二十四孝」の楊香条も試みに見てみよう。次にその本文を示す（古典文庫本に拠る）。

・月菴醉醒記「楊香」

深山逢白額 努力搏腥風 父子俱無恙 脱身饒口中  
やうきやう深山にて父とらにあふ、とらくらはんとする、きやう虎にたいして、我をふくして父をたすけよとて、身をとらの口にまかせければ、父子ともに虎くはさるなり

二十四孝詩選を忠実に和訳しようとする月菴醉醒記であるが、楊香条は理解し難かったのか、虎と闘うのではなく、「我をふくして父をたすけよ」として「身をとらの口にまかせ」ている。この和訳は、詩第四句「脱身饒口中」に基づくと思われる。第四句は危難から逃れる譬喩であろうが、人を食う虎が登場する話であるだけに複雑である。詩第一句にある「白額」も、蒙求の標題にもなっている「周處三害」の

一つ「南山白額猛虎」として知られていた。そのため、月菴醉醒記は字義通りに、饒口（飢えて食べ物を欲しがる口）即ち、虎の口から脱したと解し、楊香が、虎の食となるため我が身を虎口にさらし父を助けようとした、というように和訳してしまったのだろう。興味深く思うのは、御伽草子等と同様に、月菴醉醒記にも「我をふくして父をたすけよ」という身代わりを願う部分があることで、生死に関わる話には想起されるものではなかったか。<sup>21</sup>御伽草子等の天に祈る部分も同様のものであるのだろう。

次に、呉猛条について検討する。楊香条と同じく、御伽草子と二十四孝詩選を並べて上げる。

・御伽草子「呉猛」

夏夜無帷帳 蚊多不敢揮  
夏夜無帷帳 蚊多不敢揮  
恣渠膏血飽 免使入親闈

呉猛は、八歳にして、孝ある人なり。いゝまどしくして、よろづところにたらざりけり。されば、なつになりけれども、帷帳もなし。呉猛みづからおもへり。わがころもをぬぎて、おやにきせ、わが身はあらはにして、蚊にくはせたらは、蚊もわがみをくらい、おやをたすけんとおもひ、すなわち、いつもよもすからはだかになり、わがみを蚊にくはせて、おやのかたへ、蚊のゆかぬやうにして、つかへたるとなり。いとけなきもの、かやうのかう／＼は、ふしぎなりしことどもなり

・二十四孝詩選「呉猛」

夏夜無帷帳 蚊多不敢揮

恣渠膏血飽<sup>二</sup> 免<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>入<sup>二</sup>親<sup>レ</sup>闈<sup>一</sup>

吳猛年八歳、有<sup>二</sup>孝行<sup>一</sup>、家貧無帷帳、夏不<sup>レ</sup>驅蚊、恐<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>己而  
醫<sup>二</sup>其親<sup>一</sup>也

御伽草子には、吳猛が、自分の衣を親に着せ自らは裸になつて蚊に食われ、蚊から親を助けようとしたことが述べられているが、二十四孝詩選には、自分の衣を親に着せる記述はなく、蚊が親をかむことを恐れて蚊を驅らなかつたとある。吳猛の伝が晋書九十五にあるが、そこには、二十四孝詩選同様、蚊を驅らなかつた記述はあつても、自分の衣を親に着せる記述はない。蚊を驅らないとする文献は他に、続搜神記(芸文類聚二十等所引)、搜神記(太平御覽四一三等所引、続搜神記を誤るか)、逸名孝子伝(太平御覽九四五、古今事文類聚後集四十九所引)、敦煌本藏金二十九、同事森、同語対「孝養」、孝行録後賛章、日記故事巻頭二十四孝等があるが、やはり、親に衣を着せる要素は、見えないようである。しかしながら、この要素もまた、静嘉堂本抄と龍谷大学本抄には、次のように見えるのである。

・ 静嘉堂本抄

(一) 内割注)

吳猛(少キ時、母ノ蚊ニ食ル、時、吳猛カ我カ衣タル衣裳ヲ脱キテ、母ニキセテ、我ハ蚊ニクハル、ナリ)、夏夜無帷帳、蚊声不<sup>二</sup>敢揮<sup>一</sup>(不<sup>レ</sup>払ト云意也我ハ蚊ニクハレナカラナリ)、恣渠膏血飽(ト云タレ)、免<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>入<sup>二</sup>親<sup>レ</sup>闈<sup>一</sup>(免ル、テハアレ吳猛后ニハ、魚州ノ守護ト成ナリ)

・ 龍谷大学本抄

吳猛 少年なりし時、夏夜に、蚊来て母をくらふ。吳猛きたる衣

裳をぬきて、母にきせ我はあかはたかに成て、蚊にくはれたると、後に国司となる

吳猛条もまた、月菴醉醒記と比較してみる。

・ 月菴醉醒記「吳猛」

夏夜無帷帳、蚊多不<sup>二</sup>敢揮<sup>一</sup>、恣渠膏血飽、免<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>入<sup>二</sup>親<sup>レ</sup>闈<sup>一</sup>、  
「ごまう年八歳かうゝなり、家まつしくてかやなし、おやの為に  
我身をくはせければ、蚊おうれてみなさりぬ

月菴醉醒記には、二十四孝詩選の「恐去己而醫其親也」に相当する部分がなく、また、二十四孝詩選に、夏に蚊を追い払わなかつたとあるのを、月菴醉醒記は、蚊を追い払つたとしていて、改変はみられるものの、親に衣を着せる要素はない。これもまた楊香条と同じく御伽草子や二つの抄が付加したものであろう。

これまでの考察から、御伽草子と二つの抄即ち、静嘉堂本抄と龍谷大学本抄の間に、関係があることは明かである。では、御伽草子と二つの抄とは、どちらが先行すると考えられるのか。楊香条を取り上げるならば、静嘉堂本抄「山ニ入テ遊ハント」、龍谷大学本抄「山に入遊ふ」や、静嘉堂本抄「二人ノ者ヲ食トテヨロコヒテ」龍谷大学本抄「楊香父子を食殺さんと喜て」といったような、御伽草子にはない特異な記述が二つの抄にはある。二つの抄では静嘉堂本抄が先行するであろうことは先に述べた。静嘉堂本抄は詩句の注釈書である。詩句から話の筋を捉えようとしているために特異な記述が生み出されてくるのであろうから、二つの抄は御伽草子に拠つてはいないと考えられる。したがって、二つの抄は御伽草子に先行するとして良いだろう。



尚、二つの抄の両方が御伽草子と関わるのか、或いは一方だけがそうなのかは判然としない。楊香条についてみれば、御伽草子「天もあはれとおも給ひける」に相当する記述は、静嘉堂本抄「天モアハレミ給へハ」しかないし、呉猛条についてみれば、御伽草子「わか身はあらはにして」に相当する記述は、龍谷大学本抄「我はあかはたかに成て」しもなく、不明とせざるを得ないので今後の課題としたい。

### 三

枝賢が関係する二十四孝の抄は、御伽草子の説話本文と関わるものであった。そこで、枝賢が書写した孝子伝についても、御伽草子の説話本文と関わるものであるかを検討してみたい。二十四孝を所持或いは執筆した枝賢は、孝子譚に関心を持ったのであろうか、京都大学付属図書館清家文庫には、枝賢が書写した孝子伝一卷が蔵されている。舟橋家の旧蔵になるこの孝子伝は、舟橋本孝子伝として周知の書であるが、その奥書には「右孝子伝上下、雖有魚魯焉馬之誤繁多、先令書写畢、引勘本書、令改易之可者乎、此書、毎誦読、涕泣如雨、嗚乎夫孝者、仁之本哉 天正第八泰正二十又五 孔徒從三位清原朝臣枝賢」とあって、天正八（一五八〇）年、即ち、静嘉堂本抄と龍谷大学本抄の奥書に見える年記の前後に書写されたことが分かる。梁の武帝の孝思賦「毎読孝子伝、未嘗不終軸輟書 悲恨拊心嗚咽」が想起されるような、奥書の「此書、毎誦読、涕泣如雨」という記述からは、枝賢の感激が伝わってくるかのである。さて、御伽草子の蔡順条を見る

と、この孝子伝もまた関わっているのではないかと思われる。次に、御伽草子と、二十四孝詩選を上げる。

#### ・御伽草子「蔡順」

黒樵奉親聞 啼飢淚滿衣

赤眉知孝順 牛米贈君婦

蔡順は、汝南といふところの人也。王莽といへる人の時分の末に、天下大に乱又飢饉して、食事に乏しければ、母のために、くはのみをひろひけるが、熟したるとじゆくせざるとを分たり。此とき、世のみだれにより、人をころし、はぎとりなどする者ども来て、蔡順に問様は、<sup>b</sup>なにとて二色にひろひ分けるぞ、といひければ、蔡順、ひとりの母を持てるが、此熟したるは、母にあたへ、未熟せざるは、我ためなり、と語りければ、心づよき不道のものなれども、かれが孝をかんじて、米二斗と牛のあし一つあたへてさけり。その米とうしのも、とを母にあたへ、又みづからもつねに食すれ共、一期のあひだ、<sup>c</sup>つきずしてありたるとなり。これかふくゝのしるしなり

#### ・二十四孝詩選「蔡順」

黒樵奉親聞 啼飢淚滿衣

赤眉知孝順 牛米贈君婦

蔡順汝南人、王莽末天下大荒、順拾桑椹、黒赤異器、盛之、赤眉賊見而問之、曰黒者奉母、赤者自食、賊知其孝、乃遣米二斗牛蹄一隻而去

二十四孝詩選の蔡順条は、徐注蒙求「蔡順分椹」の引用する旧注と同

文であるので、董永条や王袁条が蒙求を典拠としていることを考えると、二十四孝詩選を和訳してもよさそうなのだが、しかし、御伽草子には二十四孝詩選にはない要素が見られる。それは、赤眉賊の問いの言葉「何とて二色にひろひ分けるぞ」(b)や、「一期の間つきすしてありたる」(c)といった呪宝譚の要素である。分樵譚として主要なものは、舟橋本孝子伝の他に、東観漢記十六、千字文「老少異糧」注、蒙求注、陽明本孝子伝(陽明文庫蔵)があるが、赤眉賊の問いの言葉を記す文献は、管見に入った資料の中では、次に上げるように陽明本、舟橋本の両孝子伝のみである。<sup>(22)</sup>

#### ・陽明本孝子伝

淮南人蔡順至孝也、養<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>甚々、母詣<sub>レ</sub>婚家、酔<sub>レ</sub>酒而吐、順恐<sub>レ</sub>中毒、伏<sub>レ</sub>地嘗<sub>レ</sub>之、啓<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>曰、非<sub>レ</sub>毒是冷耳、時遭<sub>レ</sub>年荒、採<sub>レ</sub>桑椹<sub>レ</sub>赤黒二籃、逢<sub>レ</sub>赤眉賊、々問曰、何故分<sub>レ</sub>別桑椹二種、順答曰、黒者飴<sub>レ</sub>母、赤者自供、賊還放<sub>レ</sub>之、賜<sub>レ</sub>完十斤、其母既没、順常在<sub>レ</sub>墓辺、有<sub>レ</sub>一白虎、張<sub>レ</sub>口向<sub>レ</sub>順来、順則申<sub>レ</sub>臂採<sub>レ</sub>之、得一横骨、虎去後、常得<sub>レ</sub>鹿羊報<sub>レ</sub>之。所謂孝感於天、禽獸依<sub>レ</sub>徳也

#### ・舟橋本孝子伝

蔡順者汝南人也、養<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>至々、母詣<sub>レ</sub>隣家、酔<sub>レ</sub>酒而吐、順恐<sub>レ</sub>中毒、伏<sub>レ</sub>地嘗<sub>レ</sub>吐、順啓<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>曰、非<sub>レ</sub>毒、於時年不<sub>レ</sub>登、不免<sub>レ</sub>飢渴、順行採<sub>レ</sub>桑実、赤黒各別<sub>レ</sub>之、忽赤眉賊来、縛<sub>レ</sub>順欲<sub>レ</sub>食、乃賊云、何故桑実別<sub>レ</sub>両色耶、答曰、色黒味甘、以可<sub>レ</sub>供<sub>レ</sub>母、色赤未熟、此為<sub>レ</sub>己分、於<sub>レ</sub>時賊歎云、我雖<sub>レ</sub>賊、也亦有<sub>レ</sub>父母、汝為<sub>レ</sub>母有<sub>レ</sub>

心、何殺<sub>レ</sub>食哉、即放<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>之、使<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>完十斤、其母没後、順常居<sub>レ</sub>墓辺、護<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>骨骸、時一白虎、張<sub>レ</sub>口而向<sub>レ</sub>順来、順知<sub>レ</sub>虎心、申<sub>レ</sub>臂探<sub>レ</sub>虎喉、取<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>一横骨、虎知<sub>レ</sub>恩、常送<sub>レ</sub>死鹿也、荒賊猛虎、猶知<sub>レ</sub>恩義、何況<sub>レ</sub>仁人乎也

呪宝譚の要素を持つ文献は管見に入らなかったが、孝子伝にある蔡順が虎の喉に刺さった骨を取ってやったお礼として常に虎から獲物を贈られること(c)を呪宝譚の変形と考えるならば、やはり、陽明本、舟橋本の両孝子伝が該当するだろう。では、陽明本、舟橋本のどちらの孝子伝が、御伽草子により近いのだろうか。赤眉賊の問いの言葉を比較するならば、陽明本孝子伝の「何故分<sub>レ</sub>別桑椹二種」(b)よりは、舟橋本孝子伝の「何故桑実別<sub>レ</sub>両色耶」(b')のほうが、御伽草子の「何とて二色にひろひ分けるぞ」(b)に近い。舟橋本孝子伝では「縛順欲<sub>レ</sub>食」(a)「何殺<sub>レ</sub>食哉」(a')といった赤眉賊が人を殺して食う記述もあって、御伽草子の「人をころし、はきとりなとする者共」(a)に似ていなくもない。御伽草子は、朱寿昌条の刺血写経のように、二十四孝詩選の記述に別の文献の記述を一部挿入することもあるので、蔡順条は、二十四孝詩選に舟橋本孝子伝を部分的に挿入したものと考えるのも良いのではないだろうか。

また御伽草子曾参条の説話本文冒頭「曾参、ある時山中へ薪を取に行侍り。母留守にゐたりけるに、したしき友来れり」も、舟橋本孝子伝に拠るものではないか。山中へ薪を採りに行く記述は二十四孝詩選にもあるが、それは冒頭ではなく叙述の途中であり、「親しき友」は、二十四孝詩選では「親客」となっている。舟橋本孝子伝はといえば、

曾参の行った五孝で構成されていて、その二番目の孝行、即ち「二孝」が御伽草子や二十四孝詩選と同じ話なのであるが、「二孝」の冒頭は「参往<sup>レ</sup>山探<sup>レ</sup>薪、時朋友来也」となっているのである。陽明本孝子伝を見てみれば「父使<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>山探<sup>レ</sup>薪、経停未<sup>レ</sup>還、時有<sup>レ</sup>楽成子来覓<sup>レ</sup>之」となっている。また、同話を記述する文献には、論衡感虚篇、搜神記十一、逸名孝子伝（太平御覧三七〇所引）孝行録前賛章、日記故事巻頭二十四孝等があるが、これらの文献で御伽草子の「したしき友」に該当する記述を見ると、搜神記には記述がなく、逸名孝子伝が「楽成」とするほかは、皆「客」としている。したがって、御伽草子の記述は舟橋本孝子伝に拠るものと考えて良いだろう。

御伽草子における舟橋本孝子伝の影響は部分的なものであるので、直接的なものなのか間接的なものなのか判断し難い。しかし、御伽草子の周辺に舟橋本孝子伝が存在した可能性はあるだろう。

## おわりに

徳田和夫氏は、山科言経の日記にたびたび見える二十四孝の記述に特に注目しているけれども、枝賢の息子である秀賢の日記『慶長日件録』についても、慶長八（一六八〇）年三月十五日条に、次のような記事があるのを指摘している。<sup>(23)</sup>

晴、也足軒来談、双瓶嘉肴給之、数刻打談、廿四孝ことは仮名に所望之仁有之

也足軒は中院通勝のこと、二十四孝について打ち合わせをしていた

らしい。この記事に対して、徳田氏は次のように述べている。

通勝と秀賢の二人の共同作業なのか、秀賢一人の訳注和文化なのかは明確ではないが、漢土の二十四孝テキストが本朝の一書として成立するのには、このような知識人の参画を俟たねばならない

徳田氏が推定しているように、御伽草子『二十四孝』には、清原枝賢の学問が関わった跡が窺えるのである。御伽草子『二十四孝』の最初のものは、嵯峨本であると考えられている。角倉素庵や本阿弥光悦等によって出版された優美な嵯峨本は、伊勢物語や源氏小鏡など公家の文化を引き継いでいる。御伽草子『二十四孝』もその一つだと言えるのではないだろうか。

## 〔注〕

- (1) 山岸徳平氏「説話文学の支那的要素」(『文学』2・5、昭和9年5月、山岸徳平著作集V『説話文学研究』〈有精堂、昭和47年〉に再録)
- (2) 川口久雄氏「孝養譚の発達と変遷(四)」(『書誌学』16・4、昭和16年4月)
- (3) 長澤規矩也氏「元明編刊の故事集について」(『書誌学』16・2、昭和16年2月、長澤規矩也著作集3『宋元版の研究』〈汲古書院、昭和58年〉に再録)
- (4) 母利司朗氏「『全相二十四孝詩選』考—日本近世における『二十四孝』享受史の諸問題—」(『東海近世』4、平3年9月)
- (5) 川瀬一馬氏「二十四孝詩註に就いて」(『書誌学』17・5、6、昭和16年12月、「二十四孝詩註の研究」として『日本書誌学之研究』〈大日本雄弁会講談社、昭和18年〉に再録)

- (6) 禿氏祐祥氏解説『二十四孝詩選』(全国書房、昭和21年)

龍谷大学蔵『全相二十四孝詩選』甲本、乙本の孝子の順序は次の通りである。

- 1大舜 2漢文帝 3丁蘭 4孟宗 5閔損 6曾參 7王祥  
8老萊子 9姜詩 10黄山谷 11唐夫人 12楊香 13董永 14黃香  
15王褒 16郭巨 17朱寿昌 18刻子 19蔡順 20庾黔婁 21呉猛  
22張孝張礼 23田真 24陸績

- (7) 徳田進氏『孝子説話集の研究——二十四孝を中心に——』(井上書房、昭和38年) 本論後編四章四

- (8) 徳田和夫氏『お伽草子「二十四孝」誕生前夜』『和漢比較文学叢書』6  
(汲古書院、昭和62年、「二十四孝」誕生前夜として『お伽草子研究』  
〈三弥井書店、昭和63年〉二篇四章に再録

- (9) 注5前掲論文

- (10) 注8前掲論文

- (11) 三浦俊介氏『二十四孝——董永譚を中心に——』(『国文学 解釈と鑑賞』  
61・5、平成8年5月)

- (12) 川崎博氏「嵯峨本『二十四孝』の挿絵作者について」(上)『国華』一二  
三八、平成10年12月)

- (13) 黒田彰先生「二十四孝原編、趙子固二十四孝書画合璧について」(『説林』  
48、平成12年3月、『孝子伝の研究』(佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣  
出版、平成13年)Ⅲ四に再録)

- (14) 注12前掲論文

- (15) 柳田征司氏「静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』について」(山内洋一郎、  
永尾章曹氏編『近代語の成立と展開』(継承と展開2、和泉書院、平成  
5年)所収、静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』の影印あり)

- (16) 上田憲子氏「清原枝賢撰『二十四孝注』考」(『国文学論叢』39、平成6

年2月、龍谷大学蔵『二十四孝注』の翻刻あり)

- (17) 注2前掲論文

(18) 静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』と龍谷大学蔵『二十四孝注』の孝子の順  
序は次の通りである。

- 1大舜 2董永 3丁蘭 4閔損 5刻子 6孟宗 7朱寿昌  
8田真 9郭巨 10老萊子 11呉猛 12曾參 13漢文帝 14王褒  
15楊香 16庾黔婁 17張孝張礼 18黃香 19黄山谷 20陸績 21唐夫人  
22王祥 23姜詩 24蔡順

- (19) 長澤規矩也氏編『和刻本類書集成3』(汲古書院、昭和52年)所収  
(20) 『月菴醉醒記』(古典文庫四一五、昭和56年)

- (21) 母利氏注4前掲論文の注(7)には、龍谷大学蔵『二十四孝注』と同一  
内容を持つ、金剛寺蔵慶長三年六月書写本の存在が報告されている。  
『二十四孝注』のような解釈に月菴醉醒記が拠った可能性もあろう。

- (22) 幼学の会編『孝子伝注解』(汲古書院、平成15年)所収

- (23) 注8前掲論文

(つばい なおこ 佛教大学総合研究所研修員)

(指導・黒田 彰 教授)

二〇〇四年十月十五日受理